アメリカ雑観

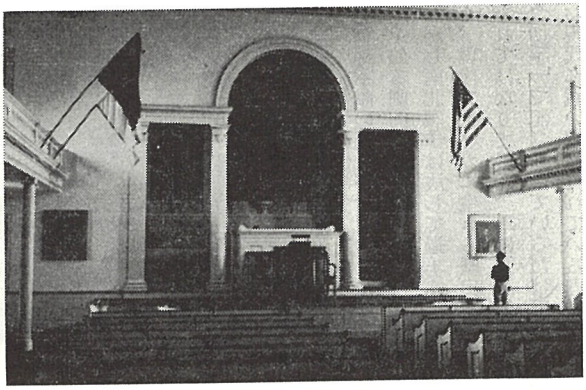
太田幹雄

私は東西文化センターとワシントン州立大学に学び、研究旅行を経て、去る九月末、約一年後に帰国しました。東西文化センターは一九六〇年、米国議会の決議によって創設された新しい研修機関で、アメリカ合衆国とアジア、太平洋地域との相互理解を文化・技術を通じて高めるのが目的です。機関の所在地はホノルル市。これは地理的な条件を考えてのことです。それからシャトル市にあるワシントン州立大学では「アメリカ言語学会」主催の夏期講習に出席しました。また研究旅行ではカナダやメキシコの一部をも含めて、米本土の各地を見学する機会に恵まれました。専門的なことを書く紙面ではありませんので、旅行中に感じたことを、あれこれと書きならべることに致します。

新島襄先生が渡米されてからはや百年に近い歳月が流れようとしています。その一世紀という歳月の流れになんとなく感動しながら、マサチューセッツ州アマストの町を訪れました。今までに多くの同志社関係の方々が、この地の訪問記を書かれています。私ごときものが今さらくり返しお話する柄ではありませんが、例の新島先生の肖像について、今一度述べさせていただきます。アマスト大学ジョンソン・チャペル内の先生の肖像は、聖壇に向って右側正面の壁に掲げられてあります。またその上方には星条旗もかざされています。左側正面にはアマスト大学第三代の学長である神学・法学博士エドワード・ヒチコック（一七九三―一八六四）の肖像が掲げられてあります。博士は地質学教授として一八二五年から一八六四年までアマスト大学で教鞭をとられた方です。画像はプリンプトンの地質学協会によって献ぜられたものです。さて新島先生の肖像には次の説明がありました。

Joseph Hardy Nee Sima
Amherst College 1870-LLD. 1889
Founder of the Doshisha University,
Kyoto, Japan
Presented by his Classmates (原文)

「ジョーゼフ・ハーディ・ニー・シマ。アマスト大学一八七〇―法学博士、一八八九。日本京都、同志社大学の創立者。級友によって献ぜらる。」ということになります。ほぼ百年前、遠く幕末騒擾の祖国を離れて、渡米された新島先生を憶って誠に感慨



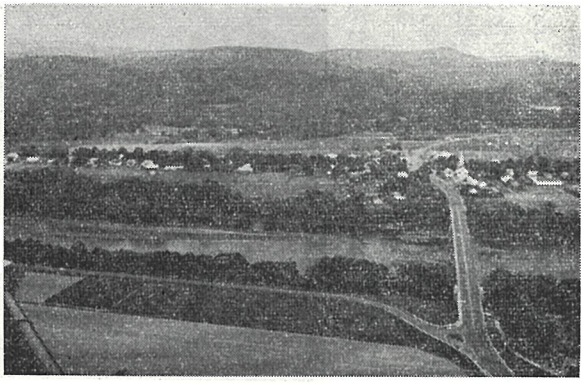
ジョンソンチャペル内部

深いものがありました。新島先生がボストンに上陸したのは、南北戦争終結の年、一八六五年の七月でした。一八七〇年（明治三年）は先生がアマスト大学を卒業された年です。また法学博士の学位は一八八九年（明治二二年）にアマスト大学から贈られたものです。

私はアマストの町にあるマサチューセッツ州立大学の学長レダリ博士（政治学）のお宅に滞在していましたので、残念ながらアマスト大学の関係者とはゆっくりお会いすることが出来ませんでした。マサチューセッツ州立大学は、国際的な生化学大会の会場として大へんな賑いでした。この大学の第三代の学長はウィリアム・クラーク博士で、札幌農学校の設立者です。「少年よ大志を抱け」の言葉は、日本では余りにも有名ですが、州立大学にはクラーク館という古い建物があるだけです。しかしアマスト大学も、この州立大学もエルムの樹立につつまれた美しいキャンパスを持っています。いかにもニュー・イングランドらしい落着いた美しさと伝統がひしひしと感ぜられました。

アマストの町からボストンまではバスなら約二時間半で行けます。途中、車はマサチューセッツ・ターンパイクを滑るように走ります。車窓の風景は野あり、林あり、牧場ありで、誠に楽しいものです。この立派な自動車道路はニューヨーク・スルーウェーに接続しています。同じ高速有料道路でもマサチューセッツ州では Turnpike という古い英語を、ニューヨーク州では Thruway という新しい米語を使用しています。ある日、友人が自動車のスピード違反をやって、巡査につかまりました。その巡査がノートに事故の月日を記入するのに In the Year of Our Lord 1963（耶蘇降世一千九百六十三年）云々と書いているのには驚きました。新英州の伝統と矜持といったところでしょう。新島先生がおられた頃、この土地の人々がどんな生活をしていたかが想像されます。建国の意気と開拓精神に燃え、信仰と人格の尊厳によって貫かれた生活であったと思います。オールド・コロニーとしての面目は今なお鮮やかに見られます。エルムの樹蔭に静かに佇む古い学舎。ゆるやかに流れるコネティカット河畔の村々。そして教会の白堊の尖塔。ここには古いアメリカが生きています。

今年（一九六三年）は南北戦争百年記念の年に当ります。南北戦争は一八六一年に始まり、一八六五年に終ったので、その中間の一八六三年から数えて丁度百年になるという訳です。一八六三年の一月にはリンカン大統領が奴隷解放令を発し、六月にはペンシルバニア州ゲディスバーグで南北両軍の激戦が展開され、十一月には大統領のゲディスバーグ国



アマスト附近

立墓地奉献の演説が行なわれた。まさに米国史を飾る劇的な年であったと言えましょう。しかし南北戦争は決して過去の物語ではなく、現代アメリカに生きる歴史であることを忘れてはなりません。単に郵政省発行の「記念切手」で記念されているだけではなく、なお現代に戦い続けられている内戦であることを忘れてはなりません。今年という年ほど、特に「黒人問題」を通じて、南北戦争の歴史的意義を痛感した年もありません。一世紀前の出来事は、今日の出来事でもありました。

私は南部諸州を廻る機会に恵まれ、ルイジアナ州ニューオーリンズに向う途中、ミシシッピ州の首都ジャクソン市に滞りました。「ホワイト・オンリー」（白人専用）と書いた飲食店でコーヒーを飲んでもなんとなく気分が面白くなく、黒人ばかり乗ったバスで市中を廻っても、自分だけが異物のような感じがしたりしました。夜道で酒に酔った黒人の群に出合ったりすると、ニューヨークのハーレムを歩いたときとはまた別の印象を受けました。ミシシッピ州が全米で唯一の「ドライ・ステート」（禁酒法励行の州）だと素人風に聞いていたからでしょうか。黒人の生活感情も外国人には「南部の精神」等の書物を読んだだけでは分りませんし、いくら「黒人霊歌」に耳を傾けても駄目なようです。また南部の白人は貴族的で保守的です。ひどい人は「井の中の蛙」だとまで悪口を言う位です。少なくとも異邦人に対しては「ヤンキー」（北部諸州人）のようには愛想がよくないようです。それは理解の足りない僻心かも知れません。いや僻心はかえって第三者にあるようにも思われます。とにかく第三者の理論では干渉出来ないものがあるようです。黒人の女の子は黒い人形を持って遊んでいます。金髪の人形を抱いて遊びません。私にはこれ位のことしか理解出来ませんでした。ひょっとしたら政治以前に「人種」そのものの問題が、原始的な様相で横たわっているのかも知れません。南北戦争百年記念のことで、ずいぶん横道にそれましたが、もう一度脱線させていただきます。テキサス州のサン・アントニオ市で知り合った米国市民権を持つあるメキシコ人が私に向って申しました。「何時かはこのテキサスはわれわれのものになりますよ」私はアラモの砦を彷徨いながら、しみじみと歴史の恐しさを感じた次第です。「アディオース」（さよなら）と言って、そのメキシコ人は立ち去りましたが、そのスペイン語の響きが異様に胸中に残りました。

広大な国土と複雑な人種構成を持ったアメリカ合衆国。一体何が統一の支柱となっているのでしょうか。機械やテレビでしょうか。それともコカコーラでしょうか。マクス・ラ

ーナーという人はアメリカ民主主義であると断言し、その精神的根源を「旧約」の正義に対する情熱、そして「新約」のキリストに現れた愛のアレゴリと言うピューリタニズムの聖書的な伝統であると申します。要するにアメリカを統一する支柱は「精神」であるということです。早くもその精神的価値を看破された新島先生は先覚者中の先覚者であったと思います。先生は「教化は文明の生命にして教育は治安の母」たることを悟られました。そして一国の教化は、ただその国だけでは不可能なことです。私達は「政治の彼方」にある精神的価値を分ちあわねばなりません。

ホノルルの東西文化センターでは、太平洋戦争中日本が侵略したあらゆる国々から来た人々と会いました。そして国境を越えた友情が結ばれましたが、交わることなしにはお互に理解し合うことが出来ません。私が会ったインドネシヤ人は「ニッポンサマサマ」と言って握手をしました。彼が日本占領下のインドネシヤで覚えた唯一の日本語だと後で教えてくれましたが、私は最初呆気にとられるとともに、恥かしい思いもしました。とにかく学問や旅行にもまして、結ばれた友情ほど尊いものはありません。私はウィスコンシン州のミルウォーキーから来たトムという青年と寝食をともにしました。彼はハイ・スクールの社会科（米国史）の先生でした。二人はまるで兄弟のように仲良くなりましたが、私は彼の婚約中の女性サリーの父親になることになりました。サリーの父親がいなかったからですが、結婚式で花嫁（サリー）を花婿（トム）に引渡すという役を引受けました。こうした役をすることを give away すると言います。私はサリーのような娘を持つ年ではありませんので、彼女は何時も私に「お父さん（ファーザー）」と呼びかけては笑っていました。聖バレンタイン祭には自分で作ったハート型の銀細工を私に贈るようなサリーだったからです。とにかく、私は父親代りをしなければなりません。私はタキシードを着込んで、長い教会のアイルを、美しい花嫁姿のサリーの手をとって歩きました。たとえこんなことでも、心温まる憶い出として何時までも残ることでしょう。その国の人々と交わることによって、いっそうその国を深く理解することが出来ると思います。

（女子中・高教諭・英語）

同志社女子中学校

募集人員　250名

受付期間　2月3日(月)～2月22日(土)

試験日　3月1日(日)～3日(火)

面接および試問については願書受付の際お知らせします

同志社女子高等学校

募集人員　40名

受付期間　2月3日(月)～2月20日(木)

試験日　2月25日(火)

試験科目　国語・社会・数学・理科・面接